

## 第9回日本歴史言語学会 シンポジウム

### 『進化言語学への招待』

2019年12月14日 13:45-17:30

進化言語学 (evolutionary linguistics) は人間言語の誕生の経緯とその後の変化・多様化の仕組みを明らかにしようとする先端分野であり、言語学者のみならず多数の異分野研究者の協働の上に成り立つ学際領域である。従来の歴史言語学が扱ってきた個別言語の通時的変化も言語進化の一側面（文化進化）に含まれるため、歴史言語学研究者にも進化言語学への関心を持っていただくことは有意義であろう。本シンポジウムでは、人間言語の大きな特徴である階層性を巡る問題、他種の言語関連能力の比較研究、文化進化的視点から見た言語進化、といったバラエティに富む3つのテーマにつき、それぞれの専門家が議論を行う。これらも膨大な関連領域を有する進化言語学の断片に過ぎないが、進化言語学への肩の凝らない招待の場にしたい。（本シンポジウムは文科省科研費 新学術領域研究「共創言語進化」<<http://evolvinguistics.net>> の補助を受けています。）

#### 登壇者

藤田耕司（京都大学人間・環境学研究科，理論言語学）

竹澤正哲（北海道大学文学院，社会心理学）

香田啓貴（京都大学霊長類研究所，霊長類学）

関 義正（愛知大学文学部，動物心理学）

保坂道雄（日本大学文理学部，英語学）

笹原和俊（名古屋大学情報学研究科，計算社会科学）

#### プログラム

13:45-13:55 はじめに（藤田）

13:55-14:55 セッション1「階層性の進化を巡る考察」

他種のコミュニケーションには見られない人間言語の特性として階層構造への依存性がある。この特性は時に構造的曖昧性を生み、必ずしもコミュニケーション効率の向上に貢献しないにも関わらず、人間言語のみがこのような仕組みを備えていることは、言語進化上の大きな謎でもあった。階層性がどのように進化し得るのかについて、異なる立場からの見解を紹介し、討論したい。

講演 1-1「階層的シンタクスと（自己）家畜化」藤田耕司

講演 1-2「実験からみる階層性の文化進化」竹澤正哲

14:55-15:00 break

15:00-16:00 セッション2「発声の系列やタイミング、音高などの運動制御」

ヒト以外の霊長類およびいくつかの鳥類種を用いて進められている音声コミュニケーションに関わる研究例を紹介する。多くの動物が発声するものの、コミュニケーション場面でヒト言語にみられるような恣意的な音列を生成できる動物は極めて少ない。動物による音列の生成と知覚能力の可能性と限界についてヒト言語との類似点・相違点を検討したい。

講演 2-1「サルの発声からヒトの発話へ」香田啓貴

講演 2-2「オウムの仲間による新たな発声の獲得と創出」関 義正

16:00-16:05 break

16:05-17:05 セッション3「ことばの変化と進化：文化進化の事例研究」

言語進化の出発点は階層構造の出現にある。しかしながら、それが進化のすべてであるとする、言語の多様性を説明することは難しい。ここでは言語の文化進化の興味深い事例を2つ取り上げて議論する。まず、英語のBE完了構文の変遷に関し歴史的言語コーパスを用いて考察し、言語変化もまた進化言語学の対象になり得ることを実証的に示す。次に、現在も進行している言語の文化進化の例として、フェイクやヘイトに関するネット上の言語現象を紹介する。ソーシャルメディアは、言語使用や社会的相互作用を量的にも質的にも激変させ、言語変化の新たな駆動力となった。ここでは、共有過多を生むフェイクニュースやモラル・ディバイドに関わるネット上の言語の特徴について議論する。

講演 3-1「英語のBE完了構文の盛衰をめぐって」保坂道雄 [奥田慎平氏（名古屋大学情報学研究科複雑系科学専攻 博士前期課程1年）との共同発表]

講演 3-2「フェイクやヘイトを助長するネットの言語」笹原和俊

17:05-17:30 全体討論



文部科学省 科学研究費補助金 新学術領域研究

**共創的コミュニケーションのための言語進化学**

Evolinguistics: Integrative Studies of Language Evolution for Co-creative Communication

## シンポジウム『進化言語学への招待』参考文献

### セッション1「階層性の進化を巡る考察」

- R.C. Berwick and N. Chomsky. *Why Only Us: Language and Evolution*. MIT Press, 2016. [邦訳『チョムスキー言語学講義 言語はいかにして進化したか』ちくま学芸文庫 2017]
- C. Caldwell and A. Millen. Experimental models for testing hypotheses about cumulative cultural evolution. *Evolution and Human Behavior* 29, 165-171, 2008.
- H. Cornish, K. Smith and S. Kirby. Systems from sequences: An iterated learning account of the emergence of systematic structure in a non-linguistic task. *Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society* 35, 2013.
- K. Fujita. On the parallel evolution of syntax and lexicon: A Merge-only view. *Journal of Neurolinguistics* 43B, 178-192, 2017.
- 藤田耕司・田中伸一・池内正幸「最新の言語進化研究と生物言語学の進展」遊佐(編)『言語の獲得・進化・変化』95-203. 開拓社 2018.
- S. Kirby, H. Cornish and K. Smith. Cumulative cultural evolution in the laboratory: An experimental approach to the origins of structure in human language. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the USA* 105, 10681-10686, 2008.

### セッション2「発声の系列やタイミング、音高などの運動制御」

- H. Koda, T. Kunieda and T. Nishimura. From hand to mouth: Monkeys require greater effort in motor preparation for voluntary control of vocalization than for manual actions. *R. Soc. Open Sci.* 5, 180879, 2018.
- T. Morita and H. Koda. Superregular grammars do not provide additional explanatory power but allow for a compact analysis of animal song. *R. Soc. Open Sci.* 6, 190139, 2019.
- I.M. Pepperberg. *The Alex Studies: Cognitive and Communicative Abilities of Grey Parrots*. Harvard University Press, 2002. [邦訳『アレックス・スタディーオウムは人間の言葉を理解するか』共立出版 2003]
- A. Toyoda, T. Maruhashi, S. Malaivijitnond and H. Koda. Speech-like orofacial oscillations in stump-tailed macaque (*Macaca arctoides*) facial and vocal signals. *Am. J. Phys. Anthropol.* 164, 435-439, 2017.
- Y. Seki. What budgerigars tell us about vocal communication. *Journal of the Phonetic Society* 21(1):31-37, 2017.
- Y. Seki, M.S. Osmanski and R.J. Dooling. Failure of operant control of vocal learning in budgerigars. *Animal Behavior and Cognition* 5(1):154-168, 2018.

### セッション3「ことばの変化と進化：文化進化の事例研究」

- T. McFadden. On the disappearance of the BE perfect in Late Modern English. *Acta Linguistica Hafniensia* 49(2): 159-175, 2017.
- T. McFadden and A. Alexiadou. Perfects, resultatives, and auxiliaries in Earlier English. *Linguistic Inquiry* 41(3): 389-425, 2010.
- M.G. Newberry, C.A. Ahern, R. Clark and J.B. Plotkin. Detecting evolutionary forces in language change. *Nature* 551, 223-226, 2017.
- 笹原和俊『フェイクニュースを科学する：拡散するデマ、陰謀論、プロパガンダのしくみ』化学同人 2018.
- K. Sasahara, W. Chen, H. Peng, G. L. Ciampaglia, A. Flammini and F. Menczer. On the inevitability of online echo chambers, arXiv:1905.03919
- S. Vosoughi, D. Roy and S. Aral. The spread of true and false news online, *Science* 359, 1146-1151, 2018.